

苧安の茅場の保全と利用に関する研究

Study on conservation and use of Kariyasu-no-kayaba, Japanese hayfields of *Miscanthus* section Kariyasua.

代表者 共生システム理工学類 教授 黒沢 高秀

〇はじめに

20 世紀初めに日本の国土の 1 割ほどを占めていた草地面積は、近年では 3%程度あるいは 1%程度にまで減少したとされる。減少した草地の多くは、火入れ、放牧、刈り取りといった人間活動によって維持されてきた半自然草地である。半自然草地は 1960 年代以降急速に生産的価値が失われ、開発や放棄後の遷移、植林により姿を消した。現在半自然的草地では、阿蘇のような大規模な草原は例外的であり、放牧、観光、伝統建築物の保全、スキー場、山菜の採取場などとして、数十ヘクタール以下の比較的小規模なものが各地で点々と維持されているに過ぎない。

茅葺き屋根の材料や飼料、緑肥などに用いるチガヤ属やススキ属などの茅と呼ばれるイネ科植物を得るために、人為的に維持してきた半自然草地を茅場という。茅の中でも苧安、すなわちススキ属カリヤス節植物であるカリヤス、カリヤスモドキ、またはオオヒゲナガカリヤスモドキは、ススキとは異なって茎が中空であるために、軽いことや乾燥しやすいという性質を持つ。茅場の多くはススキを得るためのものであったが、東北地方から中部地方にかけて、苧安専用の茅場が設けられ、ススキとは区別して利用がなされた地域があった。しかし、文献やインターネットで容易に確認できる現存する苧安の茅場は、文化庁の「ふるさと文化財の森」

(http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/furusato_mori/furusato_settei_ichiran.html. 2017 年 8 月 17 日確認) に指定されている石川県金沢市の「金沢湯涌茅場」、長野県北安曇郡小谷村の「牧の入茅場」、富山県南砺市の「五箇山上平茅場」「五箇山相倉茅場」の 4 か所程度でしかない。苧安の茅場はほとんど残されていない現状が見て取れる。苧安はススキより高標高を好み、苧安の茅場は集落から離れた山中に設けられることが多かったようで、そのため苧安の茅場は数えるほどしか残されていないようである。

一方で、これまで苧安の茅場に関する研究はほとんど行われてこなかった。半自然草原の生態学的研究は現在盛んに行われているが、それもここ 20 年ほどのことで、ほとんどが阿蘇など西日本のススキ草原で行われたものである。すでにわずかしこ残されていない苧安の茅場に注目した生態学者はほとんどいなかった。茅の民俗学的研究はそれなりに進んでいるが、ススキと苧安を区別している研究は希で、苧安の種まで正確に同定している研究は皆無に近い。そのため、現在残されている前述の苧安の茅場ですら、生育しているカリヤスの種が研究者によりきちんと同定されているのは牧の入茅場のみという状況である。

一方で、苧安の茅場で現在まで残されたものは数少なく、苧安の利用に関する知識も失われつつある。本研究では、そのような苧安の茅場について全国的な調査を行い、それぞれの茅場の苧安の種類を特定し、立地、歴史的経緯、生態学的特性も明らかにした上で適切な保全方法を提言することを目的として行っている。さらに、苧安の各地での過去の利用方法を今のうちに記録すると共に、現在の利用についての情報を集めて問題点を明らかにし、今後の苧安の茅場のあり方やよりよい利活用を考えることも視野に入れて活動を行っている。

〇研究成果

(1) 南会津町高清水自然公園ひめさゆり群生地に関するケーススタディ

本研究のきっかけは、もともとはヒメサユリ群生地の保全計画の策定を目的として行った、福島県南会津町の高清水自然公園ひめさゆり群生地での植物相調査および植生調査であった。この時の植物相調査により、112 種類の維管束植物が確認されたが、この中には保護上重要な植物としてヒメサユリ、ギンラン、ヤマトキソウ、キキョウ、ヤナギタンポポの 5 種が含まれていた。また、植生調査によりこの場所がオオヒゲナガカリヤスモドキという種類の苧安が優占する草地であることが明らかとなっ

た。この調査により、高清水自然公園ひめさゆり群生地は、ヒメサユリ以外の草地生の希少植物の生育地として地域の生物多様性保全上重要であるとともに、全国的にも珍しい、荇安の茅場が現存する貴重な環境であることが明らかとなった(図1)。また、木本の侵入が目立ち、森林への遷移が進行し始めていると考えられることが明らかになった。



図1. オオヒゲナガカリヤスモドキという荇安の茅場が残る福島県南会津町高清水自然公園ひめさゆり群生地(薄井・黒沢 2017より)。

これらの結果や、現在見られる植生の成り立ちに基づき、(1)ヒメサユリをはじめとする草地生植物を保全し、森林への遷移を抑制するために、火入れ、草刈りの管理を再開する必要があること、(2)荇安の茅場であることを活かした運営や広報を行うことが望ましいことの2点を南会津町に対して提言した(以上、薄井・黒沢 2017)。

この研究成果は平成29(2017)年4月12日に行われた福島大学定例記者会見で研究に携わった大学院生の薄井創太によって発表され、地元の新聞各社に比較的大きく取り上げられた。

(2) 全国の荇安の茅場の情報の収集

文献やインターネットで確認できる現存する荇安の茅場は4か所程度しかなかったが、草原の専門家、荇安の分類の専門家などに広く情報提供を呼びかけたところ、もう少し多くの荇安の茅場が残っていることがわかった(表1)。現在も荇安を得るための茅場として維持されている場所がある一方で、草地生のユリ属植物の保全や山菜の採取のために意図せず荇安の草地が維持されている場所もあった。いずれも草刈りか火入れ、あるいはその両方により草地

的環境が維持されている。これらの他にも、スキー場などに比較的まとまった荇安の草地が成立している場所があった。

表1. 現在までに著者らが把握している、現存する荇安の茅場(薄井他 未発表)。

茅場名称	場所
からむし生産技術保存協会コガヤ刈場	福島県大沼郡昭和村
高清水自然公園ひめさゆり群生地	福島県南会津郡南会津町
藤生わらび園	福島県南会津郡南会津町
牧の入茅場	長野県北安曇郡小谷村
無名草地	長野県木曾郡大桑村
五箇山上平茅場	富山県南砺市
五箇山相倉茅場	富山県南砺市
金沢湯涌茅場	石川県金沢市
北野農村公園, 山の斜面	岐阜県高山市

これらの場所を訪れ、荇安の種の正確な同定と植生調査を行っているところである。今後、アンケートやヒアリングなども行い、情報を収集していく予定である。

これらの茅場を訪れる過程で、文化庁の「ふるさと文化財の森」に指定された4か所の茅場以外では、荇安はほとんど利用されていないことがわかった。一方で、各地の茅葺き屋根などの伝統的建築物や、昭和村のからむし焼きなどの伝統行事における荇安の需要は大きく、茅場を所有している場所でも荇安の茅の不足が生じていることが多かった。荇安の茅場の拡張と、利用されていない茅場の荇安の活用などが課題であることがわかってきた。全国の状況を取りまとめると共に、活用されていない荇安の草原と、その地域にある伝統的建築物など荇安の需要を結びつける役割を果たして、残された荇安の半自然草地の適切な保全にもつなげて行きたいと考えている。

<本研究に関する報道>

本研究を主題とした新聞報道を以下に列挙する。

福島民友 2017年4月13日「希少植物「荇安」の草原 南会津福島大研究メンバー確認 貴重なかやぶき屋根材料」

福島民報 2017年4月13日「南会津の高清水自然公園 荇安草原全国的に貴重 福大調査 観光活用を提言」

読売新聞福島県版 2017年4月13日「南会津にカリヤス群生地 福島大「貴重な場所」保全訴え」

<本研究研究成果一覧>

学術論文

薄井創太・黒沢高秀. 2017. 苧安の茅場が残る
福島県南会津町高清水自然公園ひめさゆり
群生地 of 植物相と植生. 福島大学地域創造
29(1) (印刷中) .

学会発表

薄井創太・黒沢高秀. 苧安の茅場が維持されて
いる「高清水自然公園ひめさゆり群生地」の
植物相と植生. 日本植物分類学会第16回大
会, 2017年3月10日. 京都大学, 京都.

○謝辞

本研究は、共生システム理工学研究科の薄井
創太氏との共同研究として進めているもので
ある。本研究の一部は、南会津町「ひめさゆり
物語」策定事業の一環である平成28年度南会
津町委託・国立大学法人福島大学受託事業「高
清水自然公園ひめさゆり群生地・会津高原南郷
スキー場ゲレンデ調査事業」、および平成29年
度 CERA 地域活性化活動助成事業「苧安茅場
である南会津町高清水自然公園ひめさゆり群
生地の生態学的研究およびカリヤスの地域で
の活用に関する研究」として実施されたもので
ある。本研究は南会津南郷総合支所振興課をは
じめ、各地で茅場を維持・管理している団体・
個人や、草原やススキ属植物に関する多数の研
究者の協力の下で行われている。紙面の関係で
個別にお名前を列挙することができないが、感
謝の意を示したい。